

朝鮮中の抗日と大日本帝国の瓦解（二）

—— 駁逆の明治維新—侵略植民地主義の発足——

北 島 平 一 郎

目 次

一、明治維新と世界諸変革

ボルシェビキ革命 (Bolshevik Revolution)

社会民主主義

農村コンシユーン (village commune)

二段階革命論

フランス革命 (la Révolution française)

ルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712—78)

フランス中世議会と徳川諸侯会議

議会主義と国家変革——ルソー、ドイツ革命

二、ドイツ観念論哲学と弁証法

ドイツ自由精神とハイネ (Heinrich Heine, 1797-1856)

ヘーゲル (George Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) の国家観

ヘーゲルの弁証法

史付唯物弁証法 (Geschichtlich Dialectischer Materialismus)

一、明治維新と世界諸変革

ボルシェビキ革命

明治維新についての日本の国内的評価は、これを日本近代国家の成立と発展の出発点として何ものにもまさる画期的な大事業であったというのにつきる（明治の社会主義や帝国主義批判はそれとして一応維新ときりはなして論じられるのが大方である）。これは言う迄もなく日本国家に対する忠実な忠誠心から発した明治維新の値ぶみであり、日本人である限り、これをそう考えるのが当然であって、この枠からはみ出すものはあつてはならず、違反するものは、叛逆者でさえあるという次第である。そしてこういう前提は、水か空気の様なものであつて、何もいきばつてそう考えずとも、自然にそうなるのが、即ちその枠の中で考えるのが天然の理であるということであつた。

これは言わば明治維新絶対善論であつて、一切の悪をその中に認めないものである。明治維新は、貴族社会から平民社会への推移であるとか、封建制から立憲君主制へのそれ、農本主義から資本制社会へ、アンシャンレژیムから自由主義社会へといった変換が論じられ、それらはすべて人類の発達に不可欠の大進歩であり、それを明治維新がなしとげたと定義されるのである。そしてその大論争としては、アンシャンレژیムは徳川末期政權がそれに当るのか、明治維新がそれかといったものの、それは絶対主義王制か否か明治維新はブルジョア革命か、はたまたブルジョア民主主義革命かといったそれらが顕著なものとしてとりあげられる。ここで困難な解釈はブルジョア革命、ブルジョア民主主義革命という意義である。それは資本主義が追々発展してきて、封建制という古いしきたりや制度の中にそれが緊縛されていることが出来ず、自らそれが自らの発達の為にそういった封建制を打破する、その運動がブルジョア民

主義革命である、というのである。即ち資本主義という少年が段々發育してきて封建制というちいさい服を何時迄も着ていることが出来ないで、資本主義がブルジョア民主主義という服に着かえるのがそれである、というのである。これはマルクス主義の共産主義革命待望論を裏がえしにした理論であるけれども一方、そういった考え方そのものでもある。ブルジョア民主主義革命のブルジョアというのはプロレタリアートがこの革命に於いて主導権が握られないという意味である。

ここで明治維新の変革を理論的にあとづける為、革命が理論的に最もスムーズに展開成就されたボルシェビキ革命とその大本であるマルクス主義との関係を考えてみる。時代は逆であるがそれが最も明確に比較の例を与えてくれる。純粹社会科学的マルクス主義論というのは共産主義社会確立をめざす社会科学としてのマルクス主義という主張であるが、それとしてそれは一つの運動法則を確立しなければならず、即ち社会は生産手段の改良發達から生産力の増大となり、究極この増大した生産力を処理するのみにあつた社会体制は、資本主義体制ではあり得ず、そこから共産主義社会への移行が遂行されるのであるとする。生産力の増大を問題にする限りは、それは人類の生成、發展と共になまがうかたなくそうなり続けてきたのであるからこれは否定出来ない。そうするとそれはたしかにそうなって資本主義社会は共産主義社会に移行するであろう、ということになる。

しかしこうなると次にブルジョア民主主義革命というのは、どうなのか、その革命的理論とこのマルクス主義純粹社会科学理論とはどう一致し、整合されるのかということが問題である。ここがむつかしいところであり、ここに大きなしかし極く単純な問題が横たわっている。生産力は人類と共に増大しつづける。それが古代から貴族社会へ、封建制へ、近世から近代へと發展してきた。近代資本主義社会も小から大へ、大から極大へと發達しつづける。そうす

ると社会法則として資本制生産社会が發展しつづけることになり、それは資本主義社会を当然止揚して共産主義社会に移行するとなる。それが社会法則である。これが法則科学としての純粹科学的社会主义理論の帰結である。で、これには人類の活動、共産主義社会をめざす行動は必要ない。資本主義社会から共産主義社会へは、生産力の發展が原動力となって春から夏、夏から秋へ自然が移行する様にそうなるからである。秋から冬へ移るのに人が何の手助けをするのか、人のどの様な行動が必要なのか、という事である。科学的社会主义——社会主义の近代理論は科学的である、としてどんなプロパガンダがどれ程主張されたことか——のさし示す方向は、これである。これは共産主義の必然的到來を疑いもなく人間の心に植えつける。しかしそうなれば、どうなるか、そうすると人間は何もする必要はない。共産主義を待望して手をこまぬいて、ただジツとしていればそれでよい。その間に資本制社会は、法則に従って共産主義社会へ勝手に移行していつてくれる。何故ならそれが社会の自然の如き当然の歩み、社会法則であるからである。

純粹科学的社会主义を純粹に考えると右の様になる。そうならざるを得ない。しかしそれでよいのか。それで万事終わりか。これが大問題である。そこで共産主義がとまどわなければならぬ。これを解決したのはレーニン(Vladimir Ilyich Ulyanov Lenin, 1870—1924)である。彼の前衛理論である。資本主義社会を共産主義社会に移行さす為、この社会法則として共産主義社会を実現するのにはただ手をこまぬいてジツとしているだけでは不可である。即ち社会にはこの社会法則を自然のままに歩ませようという不逞のやから共があり、それは、社会が前進するのを押しとどめ、この傾向を反動さそうという人々であり、共産主義社会実現の為に、これらを排除して社会を純粹科学的社会主义理論のさし示す方向へ進ませねばならない。これが一大必要事である。これを成就してはじめて社会

説

主義理論が活性化される。そしてこの為には人々が必要であり、その役割をになう人々が存在しなければならない。それが社会の先頭にたつて道をきり開く人々である。即ち前衛である。レーニンはこう主張し、彼はここに科学的社會主義法則理論と人為的行動理論—革命論—を一致さす前衛理論を展開した。

論

共產主義は革命である。革命は行動であり、人為である。共產主義云々の実現という限り、そこには革命が必然であり、これ無くしては、革命は無であり、共產主義社会の実現は無い。資本主義社会の中で共產主義をとく限り、そこには変革が必要であり、革命の実行が絶対条件である。

しかしいたずらに行為を煽ってもそれは無効果である。そこには目標がなければならない。また実現の可能性というよりもここにはその必然性がなければならない。これを指し示すものが科学的社會主義理論であった。つまり資本主義社会を止揚して共產主義社会に移行する必然性をするべく指適する必要があった。従って純粹科学的社會主義理論がいまみた様なものである限り、これは共產主義社会実現の為の金科玉條の法則でなければならず、共產主義実現の為の一大テーゼでなければならなかった。それが示されてはじめて行動が説得的となる。社会法則と革命の全的一体化である。レーニンに於いてそれが実現され、革命の成就の期待と実行の立体化が果たされたのであった。これが純粹科学的社會主義法則理論と革命論であり、その一体化であった。

社会民主主義

レーニンは、右のテーゼに基づいてボルシェビキをひきい、これを革命の前衛としてその組織化と成就に邁進するが、レーニンは、第一次世界大戦の勃発と共に、亡命先のドイツから列車にのせられてロシア領内に運び入れられ

る。つまり独露戦争でドイツ側が、ロシアの内部崩壊を考え、その崩壊への攪乱にない手として彼をドイツの手で祖国に帰還させたのであった。この毒をもって毒を制する手段がどれだけの効果を発揮したのかは不明としても、レーニンによるボルシェビキ革命がロシアで成功したことは疑いない。革命やクーデターはどんなことでもやってのけるが、また国家政策もどんなことでもやってのける。

レーニンと革命の関係は、右の如きものとして、しかし革命はレーニンがつくり出したものでも、創造したものでもない。つまり無から有を生じるといふ関係のものではない。それは科学的社会主義理論のとお通りである。一九世紀にロシアではツァーリズムの積弊から諸々の社会的経済的矛盾撞着が噴出していた。そしてこれに対する批判や攻撃、攻撃が存在した。それはマルクス主義の流入と共に一段と激しくなったという。これは革命派マルクス・レーニン主義といえる、ひっくり返してメンシェビキ (Mensheviks) と呼称して可なりと考えられる諸々の思想の存在とその行動である。それらの諸々の主義、主張の根幹は一にかかって民衆的大衆改革志向である。すべての人々の合意の下にデモクラチックに、例えば、封建社会を民主的議会制社会に移行さすという考え方であり、その実行のすすめである。大雑把にいつて社会民主主義理論と言えるものである。これが結果論として如何にたよりない、一切の実行の芽をもたない浮薄なひとりよがりのものであったかは歴史の示すところとなるが、マルクスさえこれに脅惑してひとかどの社会民主主義者となっているのであるから大衆を組織するより教育して、例えば封建主義の積弊や悪所欠点をあばき出し、これを人々に教えこみ、人々を覚醒して封建制を否定し、新しい人間性と人権に根ざした社会をつくり出す様に努力するというロマンチックな暴力革命を否定するこの理論が如何に魅力極まりなきものであったかはまことに明らかなものがある。

マルクスの場合、英国の総選挙制度との関係である。マルクスはロンドンに住み（一八四九年以後）、英国の完備した選挙制度をみて、大多数党形成の可能性をそこに認めた。選挙に於いて多数を占めれば、それが自ら政権の形成になる。そして例えば社会党、社会民主党もこの方途に従って選挙で最大多数票を獲得すれば——しさえすれば——社会党、社会民主党政権の形成を果たすことが出来る、というものである。これがマルクスの社会民主主義理論であって、まことに単純明解である。こうしてここにも社会民主党改革理論の一つの根底がある。

しかしそういった方策では、社会の改造、資本主義生産体制の変革は出来ないことを破破したのは、マルクス自身であるのだが、選挙制度が確立すれば、それが人間の意識の改革を通じて多数票の獲得が可能になり、社会民主主義政党の政権成就が可能であるという考え方は、マルクスをさえ含んでまことに一般的であると云はねばならないのである。であるから選挙制度の不備な国やところでは、この総選挙制度を確立することによって政権の平和的民主的改変が可能であるとしてその制度の確立を民主化の第一の目標であるとする闘争理論も生れてくるのである。これが次にふれる二段階革命論の一方のよりどころとなる。

農村コミュニティ

こうしてここに革命の理論と実践の大綱が示されたとして、社会は生産手段の発達と生産力の増大を一つの基本として発展するのであるが、それがあある発展の段階に達するまでは社会の変革の基盤は造成されない。それが、しかしそうであっても、これを推進し、これを成就する為の強力が存在しない限りは、革命は成就しない。これがここにみえてきたところである。これを我々は明確に分別しなければならないのであって、これを混同してはならない。この二つ

のメルクマールを明確に心にもつてものごとの分析に進む必要がある。即ち理論と実践である。

ロシアにはこの期これら社会分析と社会行動理論の諸種のものがあり、それらはレーニンのボルシェビキ（多数派、実情は少数であるが、レーニンが自らそう称した）と区別する為にメンシェビキ（少数派）と呼ばれるが、ロシアの農民社会（当時八〇％から九〇％が農民であり、その約半数が農奴であったとされる。一八六一年三月三日、農奴解放）をみてそのコンミューンの共同、連帯の強固さに、ロシアは資本主義段階を経ることなく農本主義社会から直接共産主義社会に移行出来たという見解をもった人々がいる。これはヘルゼン（Alexander Ivanovich Herzen, 1812—70）、チェルニシウスキー（Nikolai Gavrilovich Chernyshevsky, 1828—89）に代表される農民党の人々であるが、ボピュリストと呼ばれた。これなどは、凡そ社会経済的發展段階を無視した議論の様にみえる。農村の共働、播種、草刈り、收穫、出荷等、また入会地、牧草地の利用等に農民が各農村単位で一体化していることからの理論である。しかし、チェルニシウスキーに於いてその行動へのすすめはみられるけれど、これらには、そう認識された農村や農民を变革の為に組織し行動へ隊列をくみこまずといった言説や行動はない。チェルニシウスキーは、その変革思想の為に彼の生涯の半ばをツァーの牢獄でくらしただけという豪の者であるけれど、そういう活動はない。レーニンは彼にあこがれ、「我等何をなすべきか」という彼の著書の題名をそっくりそのままいただいてレーニンの著述の一つを出版したいわけがある。しかしチェルニシウスキーをボルシェビキと呼ぶことは無い如くである。

農村の強固な一体性は連綿と長くつづき、結局スターリン（Joseph Vissarionovich Djugashvili, Stalin, 1879—1953）のコルホーズ（Kolkhoz）、ソホーズ（Sovkhoz）というスターリン主義共産農業もこのロシア農村コンミューンを土台としたものであった。勿論コンミューンを集団農場に改変するには時に農民のコンミューンの抵抗の強い

反乱があつて、スターリンはこれをただ強力で弾圧、押えこんで無数の犠牲を生じたとされるのであるが、反面農村の一体性はスターリン農業の全体主義によく適合したものであったのは疑いを入れない。そしてこの農村コンミュニンは、ツァーリズム (zarism) の下でも強力に広汎に存在していたので、これがツァーリズムに統制支配されながらそれをささえていた。そしてこう眺めるとツァーリズム全体的農村一体性とスターリニズのそれと逕庭いくばくなりやと設問自答しなければならない。

何れにしる農村コンミュニンの理論は、革命や変革の理論ではない。コンミュニオンから共產主義へ移行出来るといつてみたところでせいぜいそれは社会経済の分析だけの話で、革命へは何の刺激にもならない。それには農村コンミュニンを革命実現に組織し、これをひっぱってゆく言説と行動が必要である。これはいまみたレーニンの前衛論からかえりみて明らかである。

事実そこには、農村コンミュニンを革命母体とみ、それがロシアを資本主義から救出することが出来るとし、必要なのは叛乱する農民であり、ツァー、地主、警察を追いつ出すことであると主張したナロドニーキ (Narodniki) の一派もあつた。しかしこれは肝心の農村に根をもたず、農民からかえって異端視されて止むのであつた。ここで我々はこれら社会改革理論、革命理論も叛乱する主体が、それに結集、その心情をもたなければ、如何なる行動理論も効果を發揮しないということを知るのである。

革命派には種々のものがあるが、これらの中で最も過激で激越なものに所謂無政府主義者の一団がある。無政府主義は、その社会経済理論というものより行動と破壊の哲学と実践の方が先行してしまうのであるが、もともと動物の集団生活が本能的に相互依存と意思の統一を持ち加不足なく規律と制禦の中で食糧の確保と再生産と防衛を果たし

てゆく事を手本として政府の存在を無用の長物と観じるのである。即ち『相互的同情と社会性の感情がもっともよく発達している動物の種は、自己の生存を保持し、かつ多数の子孫を残す、より多くの機会を持つ』（Charles Robert Darwin, 1809—82）と云々（Memoirs of A Revolutionist by Peter Kropotkin, Black Rose Books, 1989）。そして政府無用論は、勿論静的なものではなく、政府が生物的静安な人類の生活を妨げるだけでなく、これを抑圧し政府の意のままに人民を支配することになるとして、これを廃除する方向をとるのである。そして無政府主義に於いては、科学的社會分析理論より政治的政府撲滅理論の方が全体をおおう。この場合、政府と国家とは概念上たいした違いは無い。そして何時の時代でも、どこに於いても国家は搾取の機関であり、暴力であり、弾圧である、かかるが故にこれを倒すことが至上命令となる、とするのである。ここから暴力と流血は、その為の聖なる下剤であり、革命家はその為の聖なる使徒であるという主張が次に来る。これはバクーニン（Michel Bakounine, 1814—76）の思想であるけれどもこの考え方は破壊のみに眼を向け、盜賊団をさえその為の前衛とみたブランキー派（Louis Blanqui, 1805—81）のながれをくむものであった。

こうした超過激な行動理論、政府転覆理論が無政府主義の言説となるが、こうなるとこれ程明確な叛乱行動へのいざないはない。レーニンの前衛理論よりよ程性格がはっきりしている。これは主としてロシアを中心として一九〇五年より一九一四年の間に革命派中心に大きな影響をふったとされるが、日本に於いても明治中期から無政府主義を標榜するものが現れた。幸徳秋水、就中大杉栄がその代表であるとされる。このときの無政府主義解釈は、革命極端派、政府転覆派等を指したものと思われる。幸徳秋水は社会主義を唱導していた思想家であるが、明治天皇暗殺（未遂）事件に関与したとされる為、無政府主義者と考えられた面が強い。日本では社会主義、ボルシェビキ、無政府

主義等これを区別定義する為の論争等も起こっているが、あまり前向きなものでもなかったろう。大杉栄は、陸軍幼年学校を放校されて心中社会主義を開花し、非戦論となえ、日露戦争にも反対、一九〇六年に幸徳秋水が直接行動論、議会主義否定論をとなたのに共鳴（幸徳三六才、大杉二一才）、東京神田の社会主義演説会で、「無政府」、「無政府共産」等と書いた赤旗を振り廻して検挙され、自他共に無政府主義者と認められる様になる。

所謂無政府主義はこのとき政府転覆の直接行動を主張するので、この点目的行動は明確であるが、純粋科学的社会主義理論といったそれ自身の法則科学をもたない。この故に大衆の説得という点では欠けるものがある。革命だ。革命だといってただ破壊をこととするといった面が強く、就中無政府というのであるからイデオロギーの何たるかは不明で、法則科学論を欠く上に、破壊のあとの社会を如何なる目標に向かって如何に組織してゆくかという具体的な行動内容が乏しく、また説明不可能の様であった。

二段階革命論

さて今迄のべてきたところ——社会科学的法則論と行動論とでも言えるものと表裏をなす社会分析と政策論がある。つまり所謂二段階革命論である。これは広く行われ、世界的な影響をもったが、日本に於いては、講座派、労農派の理論的闘争の内容となった面が強い。これは、主としてロシア革命（一九一七年）の生起と共に起こってきたと考え可なりと思われる。即ちロシア革命は、まず第一段階として民衆のパン寄越せデモからはじまってアレヨアレヨという間にベトログラードのネウスキー広場に一〇万を超えるという人々が集まり、デモは瞬時に革命そのものの大騒擾の様相に発展した。時に第一次世界大戦真只中の一九一七年二月二三日（新暦三月八日）であった。このデモは自

発的自然発生的に生じたものであった。騒擾は平和希求の叫びと共に一向に終息せず拡大をつづけ一挙に全国蔓延の狀態となつてしまつた。この状況の中でまさかと思つたツァーリズムが倒れてしまう。そしてルボフ公の首相就任となつた。このロシア革命の生起の態様を明確に認識しておく事が後の理論について有用となる。

この状況の中で、議會（ヂュマ、Duma）とソビエト臨時執行委員会がたつて政府を構成するがこれは七月二〇日迄つづく。この間、臨時政府に対する反対と平和回復の叫びは益々激しくなり、軍隊の一部と政府の衝突なども引起され、ルボフ公は陸将ケレンスキー（Alexander Fedorovich Kerensky, 1881—1970）に首相の座を譲る。このとき活躍したのは、右述の如くしてロシアに帰還したレーニンで、一月七日ボルシェビキを率いて冬宮を襲い、戦鬪の後、ケレンスキー政府を打倒した。

これが一〇月革命（新歴十一月）と称されるもので二月騒擾を第一として第二革命と定義される。この如くロシアに於けるボルシェビキ革命の成就是、最初ルボフ公、ケレンスキーのブルジョア民主主義革命と判断され、ヂュマと臨時執行政府、そして六〇〇にも及ぶ急遽形成のソビエト（Soviet, 會議の謂）からなる支配形態が打ちたてられた後、これが、レーニンのボルシェビキと民衆によつて打倒されて共產主義政府が結成されるのである。即ち革命は二度起こり、さきにブルジョア民主主義革命が生起して、次に愈々共產主義革命が遂行せられたとされるのである。二段階革命論というのはこの説明の謂であるが、これがロシアで起こつたとして、次に一般的必然的にブルジョア民主主義革命と共產主義革命とは世界的に段階的なものとして生起するのかどうかという問題が起こる。——起こらざるを得ない。つまり封建的な、またアシシャン・レヂーム（Ancien Régime）的な政權がブルジョア民主主義政治の前段階には必然的に支配しているのが、各国政治の歴史の実態であるから、まず、この政体を変革する為には前段階

の体制廃滅が必要であつて、これを打倒するのが、ブルジョア民主主義体制を顕現する為のブルジョア民主主義革命であることが議論され主張されるのである。これは、いまみた状況から必然的に共產主義革命を起こすという目的をもった勢力からする議論であるが、共產主義革命をみないものも、ブルジョア民主主義革命をただ起こし封建主義—アンシャン・レヂームを打倒す、という側からもこれは主張されるという面ももっている。明治維新論などは、多分にこの後者の範疇に属する議論である。

そもそも人類と生産力、生産量という関係は歴史上発展増大の一途を辿ってきた。これあるが為に採取経済から人類は今日の石油、原子力動力を駆使した巨大生産機構を打ちたてた。そしてそれは益々発展する。地球上に動物はただ単純再生産をくりかえすが、人類は拡大再生産につぐ拡大再生産で今日の富をきずき上げた。そしてその発展途上に近代資本主義社会が生まれ、これが共產主義社会に移行する。この理論がさきにのべた純粹科学的社会主义理論の根元的理解である。でこの理論からすると共產主義社会は、当然近代資本主義社会が作りあげた巨大生産の上のつかうものである。超巨大な生産量の造出が共產主義社会をみちびき、各人は毎日一定量の労働を社会に対して行つと、自らの欲する物品を欲しいだけ社会から取得させてもらう。即ち共產主義社会は豊富の理論であり、豊富の経済である。各人の欲するところに従いて欲するものを取得する社会である。

そしてそもそもが、近代資本主義社会もこの生産力発展増大の過程であらわれ出たものである。そしてここから二段階革命理論が展開される。こう説くとそれは自ら分明なものがあるであらう。生産力のある発展段階で近代資本主義社会があらわれ、その更なる発展段階で共產主義社会があらわれる。そしてそれは前述の如く社会経済の自動的進行の中から結果するものではなく、ここにレーニンのとく社会発展前衛理論がこれにからむ。これが前述した如きも

のであるが、ここに純粹科學的社會主義理論と前衛革命論の結合が存在し得たのである。

しかしこの二段階革命論を深く追及しすぎると政策論的にやや倒錯的となる。即ち何れにしろブルジョア民主主義革命でも、共産主義革命でも、近代資本主義がある程度大きく発達しなければ事は成就しないと主張するのであるから、その限りまず近代資本主義を発達させなければならない。それが革命の絶対要件である。そう考えると後者の場合、共産主義革命を成就するには、近代資本主義の発達をはからねばならないことになる。こうなるとことは二律背反的で革命論からするとその為に資本主義を発達さすのか、共産主義革命を遂行するのか、一体どちらなのかということにもなりかねないのである。理論的整合性の困難なところであらうか。

この二段階革命論は日本では異常に眷愛され、喧伝され、追及された。即ち天皇制の嚴存と日本に於ける近代資本主義の發達の為である。これが講座派と労農派の論争の背景と考えられる。前者は次の如く主張した。日本に於ける共産主義革命の実現を目指す限り、天皇制の嚴存は避けて通れない。そこでまず日本共産主義革命實現の為に二段階革命が必要であつてその第一は、ロシアに放けるルボフ公政權の打倒のひそみにならまず天皇制を打倒することである。その後天皇制のなくなった日本社会で近代資本主義の發達をはからい、徐々にレーニンがケレンスキー政權を倒した様に日本のブルジョア民主主義政權をうちこぼつて日本共産主義政權の確立に向かう。これが一つの考え方と戦術であるとするのである。今一つは、日本は近代資本主義国家であつて資本主義は日本に於いて立派に十全に活動している。資本主義の法則に日本に於いてやましいところも欠落しているところもない。共産主義革命の目的は資本主義の打倒にある。故に日本に於いても共産主義革命實現の為に、直接資本主義の打ちこわしが必要である。天皇制も日本資本主義の一要素たるに過ぎないので、それは日本資本主義を統轄管理しているものでも何でもない。

説 森をみて樹をみない式の論議は危険であつてつつしむべきである。日本に於いては直ちに直接日本資本主義を打倒する

ことに邁進することこそが日本社会を共產主義社会とする大道である、とするのが今一つの労農派の理論であつた。

この両派の議論のどちらが正しかったのかということは今日ではあまり実り多い議論とはならないであらう。前者は、一九四五年に天皇制の権力機構が変革されて、日本はブルジョア民主主義になったのである、天皇制の打倒が第一革命であるという主張が実現したのである、と言うであらうし、後者は日本近代資本主義は一九四五年以前も以後も変わりはなくまたそれは変わるものではない、と主張するであらう。ただ一つ言えることはどちらもそれが前提であり、そこから出発した共產主義社会の到来とか建設とか言うことは今日、主張しなくなるのではないかということである。即ち共產主義を何れかの社会に実現しようという様なことは今日最早問題とはならないであらうということである。一九九〇年、東西ドイツは統合し、共產主義の大宗ソ連邦は崩壊した。中国やキューバは依然共產主義体制を堅持しているけれど、またキューバのカストロ首相は一九九七年一〇月八日、ハバナで演説して六時間を越す長広舌を振り、キューバ一国になつても革命(社会主義)を貫徹すると獅子句したが、また市場経済への進行と外資の導入を既に主張している。中国共產主義は経済政策で私的所有権や市場経済を導入する方向へ進む態様である。今日何れの国々も市場経済確立を錦の御旗としてると云える。共產主義革命論や二段階革命論は今日、既にその役割を終えたとみななければならない。しかし人類は、生産力を拡大再生産しつづけ、各人が欲するものを欲するだけ社会から獲得するという方向に向かつて歩みつづけ、とどまるところを知らないであらう。そうするとそのゆきつく先はどうなるのか、如何にしてこの増大しつづける生産力を統御するかという問題は依然のこり、それが大きな解決を人類にせまりつづけることは疑いない。

フランス革命

ここでは、明治維新の変革の態様を出来る限り明確化する為、世界的歴史的変革の種々の実態を考究してその手ごかりを得ようとしている。そこで次に登場を願うのは、矢張り、フランス革命ということになる。

フランス革命も究極は、国民と王の衝突から結果するのであり、ロシアのボルシェビズムの一つの帰結がツァー・ニコライ二世 (Czar Nikolai II, reigned 1894-1917) のひそかな処刑であった如くフランス革命もそのピークとして仏王ルイ一六世 (Louis XVI, reigned 1774-1792) 同妃マリー・アントワネットの処刑 (Marie Antoinette, 1755-93) を導く。革命と国王の処刑も世界的に種々の場合がある如くで、英国のチャールズ一世の処刑 (一六四九・一・三〇) (Execution of Charles I, Jan. 30, 1649) は人口に膾炙しているが、中国の呉王夫差 (前四七三)、隋の煬帝 (六一八) 等の絶命の場合も稗史に物語によく知られている。国王、貴族の政変と共に犠牲となった例は、世界的に多いが、日本の場合は国史的に政変で天皇が処刑されたという例は無い。これをひもとけば、保元の乱で崇徳上皇が讃岐に流され、(一一五八)、承久の乱で後鳥羽上皇、須徳上皇、土御門上皇が夫々隠岐、佐渡、土佐に配流となった (一二二一)。更に皇国史観上最も名高く人口に膾炙していたのが、元弘の変で嵯峨に流された後醍醐天皇であった (一二三三)、ということになり、天皇が政変にからんで破れた場合誅罰の意味で位をおわれて帝都の外に追放されるという形をとっているが処刑の事はなかった。いまみた中で天皇は、後醍醐帝ただ一人で、あとの四人は上皇であった。こういう次第で天皇、上皇の処刑ということは無かった。ただ上田秋成の「雨月物語」で崇徳上皇の讃岐の山にさまよう亡魂のうらみの激しさは、死ぬ程つらい幽へいであったと知らされる⁽¹⁾。

かくの如く日本では、政変と天皇の運命は一応きりはなされている。それはすべての政変がクーデターがらみでフ

ランス革命やボルシェビキ革命の如く民衆の蜂起が無かったことと、天皇家の性格がルイ王朝や中国帝王の如き豪奢と奢侈から離れていたこと、また現実政治に介入することがすくなかったこと、更に宗教的で質素、そぼく、国民の象徴的存在感が強く、皇祖とされる伊勢神宮の白木の神殿がそれを如実化していること等があげられる。即ち天皇家が民衆から税金をとりたて、生活に贅をつくすことが無かったということである。明治国家三代の天皇は、明治天皇は原教が描写する如く寧ろ質素極まりなきものであったというが、江戸城を皇居としたいわば借家住いも、昭和天皇にいたって住居を絢爛豪華な宮殿として亡んだ。これも象徴的な話である。

日本では明治維新になって政変はあったしそれに伴う多くの犠牲は出たが、指導者間の処刑ということは無かった。即ち封建太宗の徳川將軍家はそのまま残り明治貴族制の中にくみ入れられた。宗家は公爵となり、その他の一門また各大名家も夫々授爵して貴族制の廃止まで国民搾取の一つの源泉でありつづけた。これを古えの例に比較すれば日本の場合も夫々政権の担当者は（天皇以外）は政変と共に殺戮されているのと雲泥の差がある。即ち平家の最後の頭領平宗盛は、壇浦に破れて近江に斬られ、その首は鎌倉のあふちの大木に架けられた。（一一八五）。北條氏滅亡に当っては、最後の將軍高時（一二三六・三迄執権、以後剃髪）は新田義貞の軍誅に伏した（一三三三・五）。北條氏をついだ足利氏の末裔義昭は、織田信長、豊臣秀吉に最後見限られ、落魄の中に窮死し（一五九七・八）、尊氏の系統は絶えた（関東管領足利基氏の系統はこの後少時続く）。

かくの如くであって、明治政権の対徳川政策はこれらの中で群を抜く開明的である。これについては、後にいふことし考えねばならないが、徳川、明治政権は共に農業搾取国家であった点は相似たのである。そして両政権共独裁国家で前者は、將軍の直下に大老、老中、若年寄、奏者番、寺社奉行、京都所司代、大阪城代、評定所があり、その各々

がその下に夫々の官職を擁していた。この官制を以て徳川幕府は、二七〇諸侯と武士、町人を支配した。明治政権は立憲君主国家の体制をとっていたが、皇族、貴族（貴族院）、枢密院、元老がありこの下に水ももらさぬ官僚体制が築かれていた。これが天皇親政の源泉を構築した（伊藤博文憲法義解参照）。そして尚それを支えるものとして天皇は大元帥として陸海軍を手中にし、これを統率した。即ち「朕は汝等軍人の大元帥なるぞ」という言葉はよく国民の心をとらえなおつづけて「我国の稜威振はざることあらば汝等能く朕と其憂を共にせよ、我武維揚りて其栄を耀ば朕汝等と其譽を偕にすべし」という軍人勅諭はよく忠勇無双の日本陸海軍兵士の心根に刻みこまれ、これを振起した。明治天皇の軍掌握が、明治国家の独裁的運動をスムーズならしめた中心であった。明治国家三代の天皇は、征夷大將軍の如く、常に軍服を着装し、馬にまたがって国民に接した。これは一九四五年敗戦まで変わらなかった。明治政権はこうした征夷大將軍的軍事的政治的同質性を以て徳川政権を扈從させこれを自己政權内にとりこんだのであった。フランス革命が何故、如何にして起こったかということは勿論重大な問題である。この説明が明治維新という日本の大変革の生起に解明の光を投げかけることは疑いない。

フランス革命はまず第一に王権に対する自由思想の挑戦であった。アメリカ独立革命が「独立宣言」（一七七六・七・四）を発し、一七八七年の合衆国憲法に結実したその自由、平等、独立精神が当然海を越えてフランス革命に大きく影響したが、フランス革命はこの自由権思想の大きな発現であった。フランス革命はその意味で民主主義革命であった。そしてまたフランス革命は、一旦王、貴族の特権を種々制限する方向をとる（しかしこれがなかなか徹底せず、一八三〇年七月革命、一八四八年二月革命と継続した民主派と保守守旧派との抗争となり、一八五三年一〇月のクリミア戦争（Crimean War, Oct. 1853—Mar. 1856）によって潮流は、突然反転して欧州と世界は一挙に強権国家

主義と近代国家統一に向かい、欧州、世界にナポレオン三世、ビスマルク、カブール (Camillo Benso Cavour)、リンカーン、明治天皇の登場となる) が、遂に私的所有権の制限等には一指もそめなかった。かえってこれを守る方向をとった。この意味でフランス革命は後発のボルシェビキ革命と確然とした一線を画し (たて前上のこととして)、この意味でフランス革命はブルジョア革命であったと定義され、されば総じてその方向に於いてそれはブルジョ

ア民主主義革命を指向したと言わなければならない。

長い歴史的な観点からすると失張りこれは世界史上の二段階革命といえ、ブルジョア民主主義革命が、一三〇年後にプロレタリア革命に移行したと言わなければならないのであろうか。

フランスに於ける自由権思想は、しかし乍ら早くから主張されていて、ルソー、ディドロ (D. Diderot, 1713-84)、コンドルセ (A. N. Condorcet, 1743-94)、ボルテール (F. M. A. Voltaire, 1694-1778) 等の思想家が夫々の自由思想を主張していた。そしてその流れをくむ人々が、彼等の主張に依拠して王権と政府を絶えず批判、攻撃したのであった。ここではフランス革命プロパーを論じるのではない為、フランス自由思想としてルソーのみにふれる。

ルソー

ルソーの自由思想は、フランス革命に最も強く影響し、その人権宣言発出に具体的にとり入れられたと言われる。ルソーは人間の全き完全性と充足性をとき、子供の自然的充足的発展は道徳の確立に自ら向かうとし、人間の自らを頼む知的独立独断性を強調し、自然に従う子供の個性の道理を説いた。そして教育に於いては教訓よりも模範 (実行で示す) に基礎を置かねばならないとした (Emile ou De L'éducation, 1762)。このルソーの教育論は一九、二〇

世紀教育の背骨と考えられ、各国で大いにとり入れられた。ルソーの教育論の中心は道德論であり、その確立であったことを忘れるべきではない。

フランス中世議會と徳川諸侯會議

明治維新とフランス革命の相似性というものはあまり無い。どちらも国家の一大変革であり、旧時代と新時代を画する一大分水嶺であったことは相共にいえないが、民衆の蜂起、王の処刑などというものは双方異なる。革命から戦争へというのも、前者は日本国内戦争にとどまり、後者は欧州大變転をもたらす、第一次世界大戦にも比すべき大戦争に発展した。大きな相異である。

しかし双方共大變革の動乱原因と目される議會若しくは会合の取扱いについて全くの同一性がみられる。そして大破綻を招来するこれは重大な問題である。即ちフランス革命に於いては、ルイ一六世がこのときフランスが逢着した一大財政難と一七八八年の深刻な凶作、これらがもたらした不況の打開作として僧侶貴族階級に援助を求め、談合を提議したが既得権の何物も一切を譲らずまた奪われたくないという彼等のかたくなさが、王の要請を拒否しつづけ、策に窮した王は、この打開策として議會を開催し、これにはかつて窮境を脱したいと考えた。こうしてフランス中世議會の開催となった。しかしフランス中世議會は一六一四年以来二七〇年間も一回も開かれたことがないという次第で、この開催の決定というだけでフランス上下は大變事の予測に震撼した。果たせるかなここからフランス大革命が起る。

フランス中世議會は三部会からなり、一部は第一階級たる僧侶が代表され、二部は貴族、三部は第三階級たるその

説 他すべてが代表されることとなっていた。いまこれらが召集されたのであるけれど、こうした近代フランスで一度も開かれたことがない議会が開催されることは、誰の眼にも王権の凋落と第一、第二階級が王を見捨てたことが今や明らかであった。こうしてその他すべての王に対する反抗がはじまる。シェイエス (Sieyès, 1748—1836) の「第三階級とは何ぞや」(Qu'est-ce que le Tiers Etat ?, 1789) が革命の旗幟となり、人々は三部会の構成を一部二部対三部同数代表とし且投票方法が議員毎のそれとなる様要求した。即ち三部会は部毎に投票され結果は僧侶貴族の対民衆二対一となる様に仕組まれていたのであった。これが拒否され、第三部は室内テニスコートに集まって反抗の氣勢をあげた。この様なときに民衆によるバスチーユ監獄の襲撃が起こったのであった(一七八九・七・一四)。フランス革命のはじまりであった。

明治維新に於ては、ペリー提督 (Mathew Calbraith Perry, 1794—1854) が軍艦四隻をひきいて浦賀に來たり(一八五三・六)、来春の再訪を幕府に嚴達して一旦去ったとき、幕府はこれに応手の機微を失い、老中阿部正弘から在京(江戸)の大小名に對抗の策をはかった。大変事の出来である。家康以来かつて無い衆議開催に諸候はとまどい民衆一般は変事と幕権衰亡の予測に後者同様に震撼した。はじめての経験で諸候はよい知恵の出る筈もなく、ただこれから甲論乙駁、自然にその為に政治、政權を談ずることとなり、これが大変革と明治維新への道を開くこととなった。

独裁的政權が唐突にデモクラチックな方法に訴えて政治を談ずることが如何にその政權基盤を危うくするかをこれらの例は如実に示している。そしてフランス革命と明治維新はこのテツを踏んで相共に生起した事は明らかであった。そして独裁的政權がデモクラチックな方法の導入、例えば総選挙、人權開放等をかたくなに拒みつづけるのは、こ

の両事実の教訓から学ぶところ多い為である。しかしまたその逆にデモクラチックな政治手法を拒むものは独裁的政權と定義して可なりであろう。今日尚ファシズムの研究が重視されなければならない所以である。

議會主義と国家変革——ルソー、ドイツ革命

ここで注意しておかなければならないことは、アメリカ独立戦争、フランス革命以来、国家的変革、革命の指導精神は言う迄も無く自由、平等、独立の原理であった。これらが革命を引起し、これを勇気づけその推進力となった。例えばフランス革命に於ける自由主義思想は先のルソーのそれがその指導原理となった。ルソーによれば各個人は社会契約 (contrat social) によつて社会の全体的意思 (volonté générale) の中に組込まれる。即ち各個人は己れの自由 (liberté) をそこに向かって放擲することによって社会の全的主權的構成の不可分の一体的部分となる。そして彼が社会契約に入るに先立って有した如く彼は究極的に自由である、と説いた。しかし法については、それは社会の全体的意思の産み出したものであるから不正なものでは無いとした。ここらは解釈困難なところで、ルソーの思想が自由主義者と共にファシストにも影響したということは、ここにあるのかとさえ思う。ルソーの最高の全体的意思の中に各人が存在するという思想が、階層的絶対權威と強力 of 思想には敵対的であつたことは、しかし言う迄も無い。彼の信奉者達は①すべての各個人は自由であり、生来善である。②存在するすべての政府は主權を独占しようとして不正に働く。③すべての君主は、主權に対し一切の權原を有しない。④英国のその如き代議政府は、ルソーの理想的都市国家に対する効果なき代替物である、何とならば、英国国民は、総選挙の挙行されるときにのみ自由であるにすぎないからである等、主張した (The Social Contract, Jean-Jacques Rousseau, A new translation by Christopher

これは、ルソーの思想がフランス、英国にその革命の達成と自由主義者達に影響した骨子のそれであるが、英国に於ける影響は当然ある限界をもった。しかし当然フランスに於いてはこれは革命の達成に大いに活力を振った。しかしこの自由思想が、またこれに基づく實際政治の変革をその下で成就しようとする試みは究極に於いて不能であった。即ち思想と自由、平等、独立を顕現し、これを実現する為の、それが志向する代議体なり、国民議会なりが、その目的を達成することは出来なかった。これは重大なる事実であった。

議会による革命の推進、国家の構成の失敗は、ドイツ統一時に於ける国民議会のそれによって明らかであった。ここではこれをとりあげる。一八四八年の二月革命は、一七八九年のフランス大革命がナポレオン戦争に転化して革命の理念を追及するによしなく、結局理想は半途に終わって後、一八三〇年の七月革命、一八四八年の二月革命と革命の波がフランスにまき起る。しかしこれはフランス大革命によって革命の波が全欧に波及、荒れ狂う中の一環として引き起こされたものでもあった。一七八九年の革命は、先にふれた如く自由主義の理念がこれを推進したが、革命を組織、收拾する力に欠け、また指導力に欠け、理想の空転とでもいう事態が現出し、そこで欧州列強による革命破壊戦争が猖獗してかかる事態となったのであった。これを先述のボルシェビキ革命の成功と対比すれば事情は自ら分明である。後者に於いても列強の革命干渉戦争が荒れ狂ったが、これは先にふれた如くボルシェビキとレーニンの牽引とがロシア革命を成功させた。矢張りレーニンは世界革命家の第一人者を以て目すべきであろうか。

ドイツに於ける一八四八年の騒擾はドイツ旧制度の破壊、アメリカ的国家的導入、王、公、大公の廃止、全官吏の処刑等を叫んで荒れたが、この中から国民議会の召集が決定された。これはプロシア王フレデリック・ウイリアム四

世 (Frederick William IV, reigned 1840-61) が憲法制定を約して騒擾の事態を収拾したのである。こうして直接普通成年男子選挙権に基づくそれが舉行されフランクフルト国民議会が成立した。ここでは言論、集会、結社等自由権の確立、財産権（私的所有）のそれ、司法の独立等が決議採択された。そしてここを以て議会と言論による改革の実現が可能となったという明るいみとおしがたった。しかしそれはつかのまであつた。この議会主義は結局また半途に終わる。クラウゼビッツ (Carl von Clausewitz, 1780-1831) が喝破した様にドイツ統一は一つの方法、即ち剣を通じてのみ達成されるのであろうか。

国民議会は軍隊のドイツ統一国家への編入を以て早くも分裂した。プロシアもオーストリアも自己の軍隊の統帥権を統一国家に委譲することに同意しなかつたのであつた。そしてシュレツスウィツヒ、ホルスタイン二州の帰属をめぐっても国民議会は外交交渉の手段に頼れず武力介入の挙に出て失敗した。即ち当該二州はデンマーク王の所有地であつたが、ホルスタインはまたドイツ連邦の一員でもあつた。複雑な国家関係であつた。デンマーク王フレデリック七世 (Frederick VII) の世となつて王は二州の完全併合を企図した。これは二州がこのときデンマークから分離しようとした為であつた。国民議会の出兵は英露両国の反対にあい、これが当然国民議会の権威の失墜となつてその崩壊の一里塚となつた。

国民議会の分裂は、プロシアとオーストリアの自由権の取扱いをめぐる衝突から決定的となつた。即ち国民議会による統一憲法の採択という国家根本的案件に両者は共同出来なかつたのである。前者は自由権を以て憲法当然の基本原理とし、後者はこれに同意せず反動化したのであつた。こうして両者は各々の憲法を討議發布した（一八四九・三）。かくフランクフルト国民議会は分裂した。尚プロシアはその統一憲法でドイツ国王としてフレデリック・ウイリアム

説

四世を推戴すると決定したがこの情勢の中で王は、国王は選出され得ずとしてその受諾を拒否し、ここにフランクフルト国民議會は最終的に行動の規範を失って瓦解してしまったのであった。

論

會議方式や国民議會が終局的に國家變革に決定打を放つことが出来ない態様は右述の様想から明らかである。尚ドイツ近代的統一については、プロシアがこの後もプロシア連合、エルフルト議會、ドイツ連邦議會等を構成してその達成を模索したが、オーストリアとの対立が深まり、ドイツ統一についてなすところ無く終わるのであった。そしてドイツ統一國家の出現はビスマルク (Otto Prince von Bismarck, 1815—98) の出現と彼の三つの戦争 (對デンマーク戦争 (Prusso-Dane War, Feb.-July, 1864) 普墺戦争 (Prusso-Austrian War, June—July, 1866) 普仏戦争 (Prusso-French War, 1870—71)) によって究極的に果たされる。クラウゼビッツの予言は的中するのである。シュレースウィヒ、ボルスタイン問題は、彼の對デンマーク戦争の勝利によって解決し、オーストリアとの対立は、普墺戦争によって最終オーストリアをドイツ統一の枠から放逐する手段をもって解決されるのであった。尚最後にこのドイツ統一にときの欧州の覇者を以て認ずるナポレオン三世が介入、これとビスマルクの対決となつて一八七〇年—七一年の普仏戦争が勃発し、ナポレオン三世はセダンに破れ捕虜となり、ここにドイツ統一はプロシア覇權の下に完成されることになった。時に一八七一年一月一八日であつた。

國家變革は、戦争、クーデター、革命等武力によらなければならないことは、ここにみてきた如くであるが、その原動力となつて人を動かすものは精神である。アメリカ獨立宣言、フランス革命人權宣言等は自由主義の精神のあらわれたものであるが、これがフランス民主的革命の原動力となり、欧州、世界に影響し、尚今日までそれは人々を動かす力となっている。

二、ドイツ観念論哲学と弁証法

ドイツ自由精神とハイネ

ドイツの自由精神は大学を中心として展開され、教授学生の間に普く広まったとされ、ここから自由主義組織として学生組合（Burschenschaften）、青年ドイツ党が生まれた。思想家としてはハイネ、ルドビヒ・ベルヌ（Ludwig Börne）等がある。ハイネは詩作にふけりまた数々の著述をなした。彼のするどい詩魂は純粹ギリシア精神と近代の精妙なインスピレーションを結合し、その美と醜惡、喜びと絶望に対する感情は魂の情緒的パノラマと称された。彼は生命に深い眷戀をもち、ハイネの生に対する理想主義は、人類の自由な輝かしい栄光にみちた未来に対するたくましい希望であった。ハイネはこの理想の実現はイマジネーションと美学的洗練によって実現されると説いた。ベルヌは最初医学徒として出発したが、後憲法と政治経済学に転じた。自由を唱道し、彼の編集した一書「手術」（Die Wäge）は反政府言説として弾圧を受けた。一代の風刺家として有名で「パリ便り」（Briefe aus Paris）に於いてドイツ人を愚行と罪惡を以て皮肉った。

ヘーゲルの国家観

ここに於いてヘーゲルをさけて通ることは出来ない。ハイネもまたヘーゲルの影響下にあった。ヘーゲルはカント（Immanuel Kant, 1724—1804）の認識論から出発した。いまこれらにすこしくふれる。カントは対象は人の認識の中に於いて純粹に存在し、如何なる程度に於いても本質的なものではないとした。即ちそれは實在（noumenon）と

現象 (Phenomenon) の間にある主観的實在である。ヘーゲルはこのアイデアの發展に於いて万有の根源を物と心の二つに帰する二元論を展開した。即ち現象界を越えた實在と知識の成立や確實性の根拠を先天的な理性に求める理性論主義を同一の範疇とした。カントを認め、生命は哲学的に五官から得られる知覚をはなれた純粹に物質的存在と考へることは出来ないとし、物質は本質的觀念意外には不存在であると主張した。即ち知覚とは、ある本質的觀念の個人的発現以外のものではない。ここから出発し、ヘーゲルは考へる形式ではなくその理念を追求し、知覚に眞実であるものは、対象に於いても眞実であるとした。彼のロジックには、論理と自然哲学、精神の哲学の三極があり、弁証法と發展の理論が論理学として構成され、ここから彼の全体系が跡づけられる。彼の發展の理論は弁証法を通じて展開されるが彼の国家観は、發展と變化の觀念、国民精神の觀念を通じて各国家グループに固有な精神それ自身の法以外の何物にも従わない最高の政治的統一体としての強力国家の存在に到達する。彼はプロシアの族長国家 (Patrimonial staat) を彼の政治的理想の実現として眺めた。これらはすべての自由な合理的な啓蒙思想から離れて、ローマン的、歴史的國家主義と保守主義の親近性を示したものであった。これヘーゲルの理念がフランス的自由な啓蒙思想とは別個の精神的土壤を提供することとなる所以であり、ヘーゲルが、マルクス、エンゲルスの弁証法的唯物史観、はてはファッシズムの理論的背景としてさえ強力な影響力を振ったとされる所以でもある。

かくしてヘーゲルは國家を契約と特權と權利の三極構造であると視、その最高のものが王の主權であると規定して、王は地上に於ける道具であり、國家は神への奉仕であり、道德的国土實現のためにあるとした。民の徳は服従、尊敬、黙想、忠誠、敬虔と規定した。ここから眼前、ウィルヘルム一世、ビスマルクの強權國家が出現することは疑いを入れないところとなる。

ヘーゲルの弁証法

ヘーゲルの弁証法には三つの要素がある。ロジックと自然と心（惑いは精神）である。これら三要素の関係は弁証法である。弁証法の観念としてヘーゲルはギリシア哲学者とカントをひく。弁証法は本来議論を意味する。二人の討論に於いて彼等は、各々議論している問題の真を追求している。これらは全く正反対の見解 (thesis, anti-thesis) である。これが最初のケースである。しかし乍ら、各々は、徐々に他者の立場を諒解するに至る。そして最終的に彼等二人は、彼等各々の部分的見解を捨象することに同意する。そして新しい広い見解を受容する。これは、彼等の各々が最初の場合に主張することをはじめた本体につき認むべきものは認めるという態度と結論である。即ち最初の反対がより高い総合 (synthesis) に調和されたのである。

ヘーゲルは、思索は常にこのパターンに従って行われると信じた。まず独断的命題が提出される。それは直ちにその反命題によって対置される。そしてそれは更に進んだ考えが総合命題をつくり出す、と。しかしこれ（既総合命題）は順々に反命題をつくり出す。そして同じプロセスがもう一度継続する。しかしそれは漠然としてではない、というのはそうすれば、それは循環論になるからである。最終的に思索は、総合命題に到達するのである。それは出発点と同一である。ただそのとき、そこに不明瞭であったものが明確化されているという事実がある。

この過程に於いて思索を発現さすものは何か。それは否定である。展開の如何なるプロセスも二つの側面をもっている。①肯定・成長の積極的側面、新しい何かの出現。②否定・反対という否定的側面、古きものの廃案。我々は子供の如くものをして成人となる。しかしそれだけではない。そこには同じ様に成長ということがなければならない。そのポイントは、思索はその展開のプロセスとしてそれ自身その重要な構成要素の一つとして否定性をもっている、

ということである。議論のみちすじに於いて、一党派によって提出された肯定的理論は他派によって否定される。かく否定は外部からやってくる。しかし魂の論述としての思索は、弁証法的である、と言うのは、それはそれ自身に内在する否定を持ち出すからである。或いは、ヘーゲルの教義に神学的背景を与えるならば、有限と無限とはお互いに相反するものとして位置されないとなる、というのは、今、有限が無限の外側にあるならば、無限はそれ自身すべてを包含するものでは無い、それは単なる別の有限であるにすぎない。反対に、有限は無限それ自身の重要な要素である。——種々の反対の統一としての精神の智識が完成する為潜在的な否定の契機に、神の力の自己顕示として明確な實在が与えられねばならない。

思索それ自身に内在する否定性のこの要素は、ヘーゲルによるすべての種類の発展をみちびき出す手掛かりである。知的成長が可能な人間というものを考えてみる。そこには彼が達成した成就と尚、更に作り出す可能性とが存在し、相剋する。しかしこれら可能性は現実性として彼のものであり、自己意識的心ばえとして、そこにはかくして彼にとつてそれら可能性と彼の成就との間の緊張が引起こされる。もし可能性が現実實在化されるならば、成就は否定される。しかも尚成就と成就のシリーズとは、これら可能性の實在化の為に必要である。心の働く力というものは無限である。しかしして思索過程にある心は、明確なものを考える。それは即ち有限なものである。しかしてこの有限物思考は思索の無限性に対して矛盾する。しかるが故に、それは該無限性に不適当ではないある思考の為に否認される。これは、思索の弁証法的過程であり、このシステムは三面の象を提出する。

論理（論究）

このシステムは、自然と有限な精神の創造の前に神（無限）の思考、即ち思考の純粹な諸形式、或いは、範疇を以

てはじまる。これらは全肉体的、理知的生活の相互連関的個々の要素からなり立っている。これは既に「精神現象学」（現象論、超経験的存在よりも人知の直接の対象としての現象とその考察を重視する学）がそのプロセスを説明してきたものであり、それによって哲学者は一つの評価が与えられる優越の地歩を占める様になっている。我々はここに、事物を他と区別する本体を考えるという純粹の本質的実体をとりあつかっている。そしてこれらは抽象から具象へすすむ弁証法のプロセスに於いて一つの鎖の様に連結されている。

ここに純粹存在の觀念を考えてみると（すべての中の最も抽象的な範疇）、それは空であること、即ち無であることがわけなくみい出せる。しかし無も又存在している。純粹存在の觀念と無のそれとは、互いに逆である。しかしこれらを考えるとき、その各々は他の範疇に入りこむ。しかしてこの矛盾からの出口は、二つの觀念を一つつつ否認すると同時にこの二つを一緒に肯定することである。即ち、何が両方になるかということは、同時にそれがならないということであるから、生成という觀念を肯定することである。弁証法的思考のプロセスは種々の範疇に属する増加する複雑性を通じてすすむ、そして絶対的イデー、或いはそれ自身客観的な精神ということに於いて最高潮に達する。

自然

自然は、精神の逆の事物である。「論理」に於いて考究された諸範疇は、すべて内部的に関係している。それらは二以上の相互関係から生み出される。自然は他方、外部的関係の分野である。空間の各部分、時間の各瞬間は相互に他者を排除する。かく自然に於けるすべての各々は空間と時間の中にある。かくしてそれらは有限なるものである。しかし自然とは精神によって創造されたものであり、創造者の特色を冠する。諸々の範疇は、その本体的構成部分としてその中に現われる。該構造とその弁証法を探究することは自然哲学の任務である。外界としての自然は、その中

説
に前以て想像された合理性は人間の出現と共に徐々に明確化されるけれど、完全に合理的（道理になかった純理）なものではあり得ない。人間に於いて、自然は自覚的意識に迄昇華する。諸々の種の進化論はこの自然の觀念に適合する。

論

心（理性を働かせる）

心はその発達が三段階を通じる。まず潜在意識（半意識、意識下、潜在意識下の自己思考）、意識（知覚、自覚、感ずいていること）、理性的意志（道理になかった合理的英知）がそれらである。次に、該意識の知覚化と具象化（精神を制度、作品等を通じて形を与える）としての人間の制度と歴史を通じて、そして最後に心は、芸術、宗教、哲学に到達する。ここに於いて人は精神としての己れ自身と神と共にあるそれを知る。そして絶対的真理をその身に体现する。かくしてここに人間に彼自身の真髄を考えるみちが開かれる。即ち難しい思索が、論理（究明）の中に解明されるのである。ここに我々は出発点に立戻った。しかしその道すじに於いて、そこに内在されている含蓄のすべてを顕在化し、精神以外の何物も純粹の活動ではなく、精神が純粹の活動であることを発見したのであった。ここに我々は、ヘーゲルのはてしない知識と広濶な心と探求の深さを知る。「ミネルバの森のフクロウは、夕闇のたそがれと共にのみその羽根を広げる」如く、即ち文明は、完熟でなければならない、そして實際断末魔の前とその中に於いてそうでなければならない。その前に、含蓄的にその本体的実質となってきた哲学的思索に於いて、それはそれ自身とその重要な意味を知覚する。哲学が登場する時、ある形式の世界は成長をとげた。文明はそれが作り出す哲学に於いてそれ自身を知覚するところまで高まる。哲学の仕事は構築することではなく、事物の意味を知的に理解することである (Ideas in context, HEGEL, Religion, Economics and the Politics of Spirit, 1770 - 1807, by Raurence

Dickey, Cambridge Univ. Press, 1987. Hegel, Selections, ed. by M.J. Inwood, Macmillan, 1989)。

史的唯物弁証法

唯物弁証法の本質的素性というのは、哲学的唯物論と弁証法の組合わせである。唯物論というのは、物質世界というものは、五感によって知り得る、心や精神から独立した客観的実体をそなえたそれであるというものである。それは心や精神の作用の実体を否定しない。しかしそれは、それらが、それからつくり出された物質的作用に依存していることを確言する。感情、感覚、思考等は脳の働きである。諸々の観念は、故に、それが一旦起こった時には人間活動に於ける本質的部分となるけれど、物質的条件の作り出したもの、反映したものとしてのみそれらは発現する。唯物論は観念論の対立として理解される。唯物論によると観念論は、事象を心や精神に依拠するものとして取扱い或いは、心や精神は、事物から独立に存在し得るものとして取扱う。唯物論者は、観念論者の見解と彼等のそれとは歴史的発展のプロセスを通じて絶対的に相反するものと説く。唯物論と観念論を結合し、もしくは妥協さす一切の試みは混乱と矛盾を結果するのみである。事物の第一義性、心そして観念の第二義的、本源からの派生的性格を主張して唯物論者は超自然的、理外の深遠的な実体を否定する。

マルクス (Karl Marx, 1818-83)、エンゲルス (Friedrich Engels, 1820-95) は、唯物論者としてこれらの理論に依拠するが、彼等は一八世紀フランス啓蒙学派の唯物論哲学を次の様に批判する。初期唯物論は型にはまった機械的理論であり、空想的 (形而上学的) 抽象論である。①それは、あらゆる自然と社会の進行過程に一律の機械的原因という観念を押しつけた。そしてあらゆるものを物質的微小部分の相互作用という関係に縮少するみちを追求した。

②かくしてそれは結局、自然に於いても社会に於いても発展に對処することが出来なくなった。この理論の論拠は近代科学の発見の中にある。それは特に熱力学、地質学、そして生物学のそれらに著しい。これが機械的唯物論の決定的批判につながる。動きこそは事物存在の方式である。物質世界に於いては、絶えざる変化と発展がその属性である。即ち一つの型の動きから他の動きのそれが起こる。例えば化学的諸変化が生命的變遷を起こし、生命の有機組織体が意識を發達さす。生命と意識とは、低次限の存在形式を基礎としてそこから發展してきたより高度な事物の運行のそれであり、それら自らの素質と發展の法則を有する。かくして唯物論は、機械的決定論であることに終止符をうち弁証論的となる。

唯物弁証論はヘーゲルに負うところ多大である。しかしそれは事物を抽象的にみ、その各々それ自身とあたかも固定特性を附与された如き形而上学的思索の方式に反對するという意味に於いて、弁証法は事物のあらゆるものを彼等の運行と変化、相互關係と相互作用に於いて考察する。あらゆるものは、成ることとやめることとを継続的進行過程の中にある。そこに於いて万物は永久的なものではなく、万物は變化し、ついには古き不用は新しき有用にとつてかわられる。万物は、矛盾の側面と様想を含む。その衝突の緊張は、変化とそして究極、その変型且解体を引越す動因である。漸進的量的増大または、減少は、内部的緊張がある破裂点に達した段階で基底的質的變化を引越す。ヘーゲルは變化、發展を世界精神、或いは理念の、それ自身を自然と人間社会に實現する、發現とみたが、唯物論ではこれを物質世界の性質に内在する固有なものと規定した。それ故にそれは、人はヘーゲルが試みた様に「唯物弁証法の諸法則」から事物の現実のコースを演繹的に推論、結論づけることは出来ない、諸法則は、諸々の出来事を根拠としてそこから推論されなければならない、と主張した。

唯物弁証法論は、すべての知識は諸感覚からもたらされるという唯物論者の前提から出発する。しかし知識は、意識の上に残された印象から排他的にもたらされるという機械論的見地に反対して、人間の知識は、机上の空論ではなく、実施の経験から学んだ活動の課程に於いて社会的に獲得されるものであるという人間知識の弁証論的發展を強調する。人々は彼等の理念を彼等の常習的行為（習俗）にあわす様に形成しながら、事物の知識を彼等の實際的諸事物との相互影響作用を通じてのみ獲得することが出来る。そして社会的常習行為だけが理念と現実的なものを一致させる試金石である。この知識論は、「主観的唯心論」と「客観的唯心論」を二つ乍らしりぞける。前者に於いては、人々はただ思慮、分別のある考えという外観のみをそれによって得、事物それ自身の理解は人々を避けてゆく。後者に於いては人々はただ純粹の直観、或いは思維によって、感覚をはなれ、五感を超えた超知覚的実体を知る事が出来るのみである。というのは、それは超知覚的実体を、錯覚によって人をまどわす、とし、尚次の如く主張する。事物についての人々の理念を社会的常習活動に適用することによって、又実験的技術を手段として人々は、「現象」と共にまた諸事物それ自身を―それは常に不完全なものとして繰り返されるが―知り得る様になる、と。

ここで唯物弁証法の歴史観がそれ自身極めて重要となる。それはその一般哲學的見地とつろくしたものである。人の心的、精神的生活、その理念、目的等は、人間存在の物質的諸条件から発する。これら諸条件の生成が人間發展を条件づける。就中すべての人間は生活の諸手段を生産する為に協力しなければならない。一切の自意識的決意から別に人々は彼の生産力とその段階が必要とする社会的諸関係の中にある。所有（権）関係を含む、これら生産諸関係が経済的機構を決定的に作りあげ、そして社会の階級的諸関係をまた決定的に構成する。社会的諸制度、一般に優勢的に行われている理念の諸模様はこの決定的な社会経済的基盤の上に構成される上部構造であり、それとして起こる。

説 生産諸力の発展に際し、しかし乍らこれら関係の一層の発展は、現段階の現存生産諸関係がこれを阻止し、押しとどめようとするのが一般である。この時、社会革命の時代が幕をあける。古き社会システムはその固有の諸制度とそして社会的諸理念と共に大なり小なり激烈に新らしいそれらによってとってかわられる。さてこれが、史的唯物弁証法の主張の眼目であり、この主張の展開とその科学的正当分析の論拠の為にこの理論がある、と言わなければならない。

この分析の細目に於いて史的唯物弁証法は、資本主義生産は単に社会進化の一時代を画する一生産段階のあらわれたものに過ぎないと主張する。それ自身は、封建主義の破砕から結果したものであり、それは順番に社会主義生産に道を譲ってゆかなければならない、と。資本主義生産段階の諸矛盾は、その下で私的所有権という怪物が、社会的諸必要物を満足に供給しようとする生産の完全な発達と発展をくじいているが、すみやかに社会主義に絶対的に移行しなければならない、ここでは全生産手段は社会的所有財産となり、人による人の搾取、また階級的一切の闘争はやむそれは「各人はその能力に応じて、から各人はその必要に応じて」への一大原則に従って組織される共産主義社会の実現である。これはまた、人間性自由のあけぼのである。人々はここに彼等自身の存在条件の全き主人となり、最早強制はない、彼等自身の統制以外、彼等の理念や行動に加えられる一切の桎梏は存在しない。

この理論出でて世界は騒然となった。共産主義、理想社会の実現というスローガンはアツという間に全世界、地球をかけめぐり、第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけての世界をこの社会の建設という戦いにおとしこんだ。第一次世界大戦中にロシアに所謂共産主義政権が出来て、一九三六年ソ連憲法の発布でそれはピークを迎え、人々は世界的に共産主義の実現に向けて狂奔した。当然共産主義と資本主義反共陣営とは画然とわかれ、互いに激烈な血の闘争となった。第一次世界大戦後、第二次世界大戦の勃発の歴史はこれら両陣営の戦いのそれとって過言ではない。

しかしソ連は共產主義の名の下に貧困をつづけ、戦争と強制労働、集団農場を失って一九九〇年、誕生七三年目にして亡んだ。資本主義は勝ち残った。

尚、史的唯物論はつづいて次の様に主張する。もとより史的唯物論の主張の内容は、それが強調する様に、全くそれ自身そうである如く歴史的、時代的、経過的産物であることは何人も否定し得ない。その政治哲学は歴史の唯物論的分析から由来する。生産手段に於ける私的所有のはじまりと共に社会は敵対的諸階級に分裂した、――搾取者と被搾取者――。そしてあらゆる政治は、その結果生じた階級闘争の発現したものとなった。国家が一支配階級が残余のすべてを抑圧支配する為の道具として造成された。宗教的、哲学的、政治的そして道徳的諸理念（イデオロギー）の体系は、一階級の支配、或いはそれに叛乱し、またはそれをくつがえそうとする他の階級のたたかいを支援する為の特定の諸階級の展望として発現した。社会主義革命は、現代労働者階級によってのみ達成され得る。それは、支配階級から国家権力を奪いとり、「官僚的軍事機動力」を破壊し、そして労働者階級の社会主義国家を建設するのである。階級制度なき共產主義社会への究極の移行と共に最終的に国家はなえしむ。そして支配の政府は、今や単なる事務処理の為の行政機関となる。

これら史的弁証法的唯物論は、その根幹に於いてマルクス・エンゲルス、レーニンの言説にかかる。レーニンは「新型」政党の観念を唱導した。即ちそれは高度に組織化され、鉄の規律を与えられ、そして各国内に於いて社会主義の勝利の為に労働者階級による階級闘争に身をすてて尽くすものの謂である。彼はこう強調した。党は、弁証法的唯物論をその身に体得しなければならない。そしてそれをあらゆる活動に於けるみちびきとしなければならない。このことが、就中党の理論的明確化と活動に於ける純一性を妨げる雑多で異質な観念の流入を排除することとなる、

説と。最後にレーニンはマルクス・エンゲルスの所論は、新しい発展、特に自然科学に於ける新発展によってとってかわられてしまった、という世界社会主義運動中のある人々による主張を反駁して、最近の科学的諸発見はマルクス、エンゲルスの哲学的教義と弁証法的唯物論の正しさを明瞭に確言する、とのべた。レーニンはこれらの論争を通じて、弁証法と知識論の正当論に貢献したのであった。

もう一つ言えることは、弁証法的唯物論のその創設者による組織的体系的論作というものはない。彼等のこれに関する見解は、主として彼等の行う政治的活動、また社会学的、経済的究明から生じた論争のコースの中に種々見出されるものがその殆んどである (The Cambridge Companion to MARX, ed. by Terrell Carver, Cambridge Univ. Press, 1991. Marx and Engels, Basic Writings on Politics and Philosophy, ed. by Lewis S. Feuer, Anchor Books Edition, 1989.)。

(1) ただ青史にはのせられていないが、関ヶ原の地の該合戦の際に大谷刑部陣となる小山の中復に弘文天皇処刑の地という場所がある。山林の中で数本のひよろ長い樹木をまばらな低い石の杭でかこった様な場所、側に碑がたっている。壬申の乱の激戦地という事で天智天皇の弟の大海人皇子軍と天皇の息、皇太子で太政大臣であった大友皇子軍が皇位をめぐるこの山腹で戦い、下の川が敵味方の流した血で黒く染まったというので土地では黒血川と呼んでいるその場所である。大友皇子は弘文天皇となって一年間で、この戦いに敗れ、捕われてその場で処刑されたのである。真か、偽か、またこの事実をしるした古記録でもあるのか、著者は知らない。そこへ案内してくれたタクシーの運転手さんも、土地でもあまり一般の人はここを知らないでしょうといった。我々が訪れたのはおそい夏の午後でまだ陽は高かったが山中はくらく、石の杭だけが奇妙に白かったのを覚えていた。

(2) これに似た話は、徳川家康の生死についてある。大阪堺市の南宗寺、千利休で有名であるが、この寺内に徳川家康の墓と

称するものがある。木組みの柵の中に台座を置きその上に安置された縦一五〇樞、横三、四〇樞あるかという立派なもので俗名が刻まれている。これは、大阪夏の陣で、敗勢の大坂方が徳川方の主将家康の首級をあげて頽勢を一挙、既倒に転回せんとして天王寺口の家康本陣に切こんだことから起こった。突撃に成功したのは、真田幸村軍で、全軍赤一色の所謂赤備え、旗、差物、鎧銅等すべて真赤に染めて突進した。真逆と思って油断していた家康本隊は決死の幸田軍団に押しまくられ、遂に旗本達まで逃散という事態となって家康は最後、北方淀河畔に向かつて走った。ここへ真田の伏勢があり、身一つでのがれてきた家康と少数の側近は彼等の必死の攻撃で全員ここであえなく討取られたのである。南宗寺の墓はその為のものだという次第である。真か偽か。源義経が奥州で死なずにえぞへ渡りアジア大陸へこえてチングス・ハーンとなったという伝説は広く人口に膾炙して明治時代にはその学術論文まで出たというが、家康戦死の話はここ堺の南宗寺だけのそれである。しかし大阪夏の陣が一六一五年五月、家康七四才、その死は翌一六一六年四月であり、その三月に將軍秀忠あるのに彼が後水尾天皇から大政大臣に任じられている。大阪夏の陣で豊臣家を亡ぼし、名実共に天下一となった彼への報賞かそれとも、死した家康へのその意味の追贈かとも考えられる。しかし家康が側近二、三名と命からがら淀川までにげ、そこで舟を辨当売りの舟子に与えられ、虎口を脱したという話が大阪ひらかたにある。その後その辨当舟は家康からお墨付きをいただいて以後、「くらわんか、くらわんか」と高圧的に商売をして人気を博した、とある。くらわんか舟の由来という。大阪での話である。関東方面では滅多に流布しなかったであろう。土地、土地には青史にないくさぐさの数奇な物語りがあり、日本史を豊かにしている。若しくは混乱させている（東京佃島の家康物語りも大阪寝屋川の発出である）。

(3) ここですこし考えてみなければならぬのは、日本の一九四五年以降の教育原理である。それは「自然衝動の抑圧、旧慣への順応努力は健康な心理発達に害あり」というので、これはフロイト (Sigmund Freud, 1856 - 1938) の説であるとして一世を風靡した。日本教育界は今日でもこの原理の下にあるといつて過言ではない。これによって子供に対する一切のしつけ、教導、指導が放棄された。子供を放縱と懶惰にまかすことが民主主義教育の原点なり、と誤解し、これに反するもの、逆らうものは封建主義であり、ファシズムであると極めつけて徳川時代以来長年つちかっていた日本教育の醇風美俗を徹底的に破壊してしまった。そして「一四と云えば助かるに一五といったばかりに……、という俗謡のとおり」の思想が平成日本の教育界また一般に確立してしまったのである。しかしフロイトの説いたところは、果たして右の様なものであったのであろうか、彼は精神分析学者として主として人間の性的衝動について理論を展開した (Psychopathologie des

alltagsebens, 1904)。それは次の如く要約される。①ノイローゼの殆どすべてのケースは、性的欲望の抑圧にその原因がある。②性的欲望は、思春期に於いてよりも寧ろ誕生時と共にじまる。③子供の性的発達に於ける妨害が、精神的發育不全（低能力）のすべてのケースを説明する。そして正しい方向に導かれると、性的衝動は高潔な業績を上げる力に昇華する、と。これは非常に興味あるテーマであり、それについての分析であるが、これが広く読まれ各方面、特に教育界に大きな影響を及ぼした。しかしこれに対し、一方これは、性問題のあからさまな論究として特に①の分析に大きな非難がまき起こったものであった。

放縱と懶惰のすすめはこの論の悪しき応用であるが、人間生活、特に社会生活に倫理道徳は不可欠で、これを説き推奨する論こそあれ、その原理と推進を否定する論は為にする悪業であり、もつての外のことである。明治維新が徳川政權からスミーズに産業的移行を果たし、日本資本主義の発達がみられたのは、日本に於ける徳川時代の倫理道徳の発達のお陰であった。

マックス・ウェーバー (Max Weber, 1864—1920) は、「プロテスタンチズムの倫理と資本主義の精神」(Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, 1904—5) で、資本主義の発達と自由なる倫理道徳の発達の不可分性を強調し、勤勉と勤儉の精神の大事さをのべているが、日本に於いては、自由精神ではないかもしれないが、儒教の五常・五典の精神が、中朝韓を通じて流入し定着した。江戸時代、漢学の諍々たる学者が輩出した。荻生徂来、伊藤仁斎、中江藤樹、山崎闇斎、林羅山等々、一寸数えても忽ち十指に余る。資本主義は倫理觀無くしては発達しないという原理を地でいった様に日本資本主義はこれをうけて明治時代極めてスミーズに発展したのである。ちなみに言えば、この勤儉、勤勉の精神と商業道徳については、井原西鶴が「日本永代蔵」に於いてウェーバーと同様の言説を後者より二一六年早く堂々と主張展開している(北島平一郎著作集第三卷・一九九七・二刊、(4)近代外交史三つの視点への試論参照)。日本人の経済感覚の秀拔性を示す一例である。平成日本の資本主義はまさにこれらの主張と異なる現象で、会社、銀行、証券、信託といった産業機関の幹部が贈収賄、背任、脱税、利益供与等で続々逮捕されている。日本資本主義の倫理の崩壊前夜を思わせる。商売、工芸の神様は、マーキュリー (Mercury) であるけれどもこの神様はまた泥棒の守護神でもあられる。ここに商業と盗との微妙な葛藤が存する。これ資本主義の存立と発達に倫理主義が欠かせない所以である。

更に近代資本主義発展の端緒にはナショナリズムが必然の現象であった。今日の世界主義の潮の中では、ナショナリズムはむしろ悪である。特に第二次世界大戦を経過しては、その感は一層深い。今日では例えば、ユーロ (ヨーロッパ統一通貨)

の出現は、一今のところ英国の英連邦を背景とした躊躇があるが——時間の問題となってきた。しかし例えば明治維新にナショナリズムの昂揚があり、二七〇封建諸侯と諸国のネーション日本の統一が完成したればこそ、封建分権主義を敝履の如く捨てざる事が出来、近代資本主義の縦横の拡大が可能となり、その発達がうながされたのである。ケインズ (J. M. Keynes) も云う如く経済基盤の拡大と統一が経済の発達には望ましい、のである。この意味でナショナリズムは地縁的なものと言わなければならない。そしてこのことは近代国家統一の点で、米合衆国、ドイツ、イタリア、フランスに於いて日本と同様であった。

(4) しかし資本主義は共産主義にまつわる脅威のとれ去ったあとで腐敗し、例えば日本資本主義は汚職、贈収賄、利益供与と資本主義機構内で刑事事件が踵を接し、自己崩壊の危機にさらされている。さきにものべた様にマックス・ウェーバーが「プロテスタンチズムの倫理と資本主義の精神」でいみじくも喝破した様に倫理主義をかけた資本主義は生成、存在の条件を失うのである。明治期、日本資本主義は、徳川時代盛行した儒教と五常五典の倫理の確立のおかげでスムーズに封建主義から資本主義に移行したのであった。戦後五〇年、誤った日本の教育は新しい倫理観の造出を怠り、孔子教の君子観をふみにじて低迷している。日本資本主義のたずなはたちきられようとしている。思えば社会主義の資本主義発展に及ぼした影響はまたはかりしれざるものがあった。社会主義、共産主義の盛行なければ、女工哀史は跡をたたなかったであろう。「もしも月給が上ったら」という歌は歌いつづけられなければならないであらう。そして即ち今日、賃金ベースの改訂は国家政府の手で毎年常習慣行として行われ、職場の改善も著しい。社会主義、労働組織の流血のもとに戦いとってきたものは、こういう形で今日の国家社会にいみじくも実現している。かくして社会主義と労働組合はこの現実の前に最早その役割を終え、その存在基盤を失ってしまったのであらうか。我々は日本資本主義自壊のおそれの前になつてその意味と条件に於いてこの事を沈黙考ししなければならない。しかしまたひるがえって考えれば、人はしなければならない、してはならないという人間の意識下の義務観念に導かれ、それが国家主義に於いて発露されたときには、大きな変革を世の中にもたらすこともある。即ち第二次世界大戦という未曾有の大災厄をもたらした一半は、ここにあるともみられる。これはヒトラー、ムッソリーニ、スターリン、日本軍部等にうかがい知られるところである。彼等は国家主義観念に導かれ、しなければならぬという倫理義務にかりたてられてあれだけの悲劇と破壊を地球上にふりまいた。人的犠牲何千万人であらう。これを人間意識の問題として抽象的にとりあげるならば、人間努力の優たるものであらう。しかしそれが外に顕現したときには、あの空前の大災害

を世界に課して人類悲泣の一つの究極をあらわした。このことも我々は、否、人類は忘れるべきではない。倫理、道德、義務、ああそれは如何なる意味を人間世界に果たそうとするのであろうか。但し、もう一回ひるがえって考えると、何事にまれ、世界大戦の犠牲と比較して何かを論じようとすることは立論の基礎がたたないことになる。ただここに一つだけいえることは、デモクラシーの原理は、他人の人格、人権、自由を相互に尊重し合うということであり、その外枠は、世界的平和と福祉と社会的正義を実現することではないということである。